一　般　演　題

1. Scinti scanner の Arm counter への応用（第3報）
——^{47}Ca 吸収試験の基礎的・臨床的検討——

鳥住　和民　山田　龍作　（和歌山医大・放）
戎野　庄一　森本　鎮義　（同・泌）
上芝　教昭　（国保那賀病院・放）

第1報，第2報において，Scinti scanner を Arm counter として腸管 Ca 吸収試験を行うべく，基礎的・臨床的検討を行った結果，若干の問題点を解決することで，十分使用に耐え得るとの結論を得，報告してきた．今回は一部の基礎的検討（ウインド幅設定の変更）を加えるとともに，その臨床応用についての成績をここに紹介する．

〔ウインド幅設定の変更〕

エネルギー設定に関しては，^{47}Ca 測定の意味から考えて，従来のエネルギー設定 100 KeV～∞ から，娘核種である ^{47}Sc (160 KeV) の影響を受けない条件 300 KeV～∞ に変更し測定することにした．

〔臨床的応用〕

1. 正常者　男子12名 (26～40歳) および女子6名 (23～39歳) の健康成人の ^{47}Ca 吸収率は，おのおの 54.1±4.7%，51.3±4.3% であった．

2. 副甲状腺機能亢進症　3例の原発性副甲状腺機能亢進症はすべて異常高値 (82.1±7.1%) を示した．

3. 副甲状腺機能低下症　3例の特発性甲状腺機能低下症は 34.7±3.6% の低値を示した．

4. 骨粗鬆症　骨粗鬆症5例は 31.6±5.3% と著明な吸収率の減少がみられた．

〔結　論〕

本法はきわめて簡便であるとともに信頼性が高く，検査日数も 3～4 日間と短く，一般病院においても行うことが可能である．

2. 乳癌における骨シンチグラフィの臨床的検討

藤井　広一　熊野　町子　有田　繁広
中川　賢一　浜田　辰巳　石田　修
（近畿大・放）

乳癌の遠隔転移の中で，最も頻度の高い骨転移の早期発見に，骨シンチグラフィが有用であることはすでに報告されている．われわれは乳癌症例の骨シンチグラフィを臨床的に検討したので報告した．

対象は昭和57年1月から昭和58年12月までの2年間に，当院で ^{99m}Tc-EHDP ならびに ^{99m}Tc-HMDP による骨シンチグラフィを施行した乳癌症例の中の 126 例である．このうち転移を疑う異常集積を認めたのは38例である．初診時年齢，T 因子，N 因子，腫瘤占拠部位等の各項目につき検討した．次の結果を得た．

〔結　語〕

1. 乳癌症例 126 例の骨シンチグラフィを臨床的に検討した．このうち38例で骨異常集積を認めた．

2. T3 以上，Nlb 以上の症例では，異常集積を示す割合が高かった．また，多発性に集積を認める例が多かった．

3. 乳癌への骨外集積は髄様腺管癌で高率に認められた．

4. 骨外集積群は，非骨外集積群に比して，組織内カルシウム沈着を示す割合が高かった．

5. 初回治療から異常集積出現までの時間が1か月以内の症例には T3 以上，Nlb 以上が多かった．一方，2年以上の症例には T2 以下，Nla 以下が多かった．

3. 頭蓋骨を中心に発生したと考えられる血管内皮腫の1例——骨シンチグラムの経過を中心に——

石丸　徹郎　坂田　恒彦　岡橋　進
前田　裕子　山﨑　紘一　赤木　弘昭
（大阪医大・放）
黒川　彰夫　（同・第一病理）

今回われわれは，頭蓋骨に原発したと考えられる悪性血管内皮腫の1例を経験した．発生部位としてはまれな頭部に外傷をきっかけとして発症し，その後腸骨にも発生をみた．診断は病理組織学的に，異形成の強い内皮細胞の血管腔形成所見と特殊染色により確定した．経過中1年8か月の間に7回の骨シンチグラムを施行する機会を得たので報告した．

症例：30歳男性．主訴：左前頭部腫瘤．既往歴，家族

Presented by Medical*Online